

著者	信時裕子
タイトル	海道東征—私の「筆跡鑑定入門」
掲載書(誌)等	交声曲 海道東征 [プログラム]
発行所	
年月(日)	2019.11.08
備考	主催：産経新聞社 会場：ザ・シンフォニーホール(大阪)

URL <http://www.nobutoki.sakuraweb.com/muxw1anr8-123/#>

注：PDF は著者最終版

海道東征 — 私の「筆跡鑑定入門」

信時 裕子(音楽学)

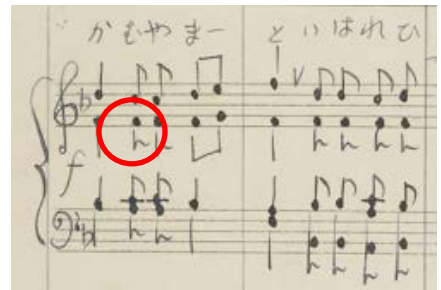
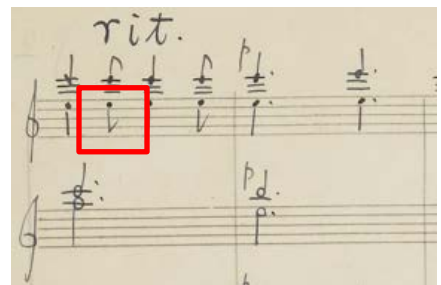
信時家に残る「海道東征」手書きのフルスコアを「自筆譜」と断定できずに悩んでいた時期があった。通常、作品が出来上がると、妻のミイ（東京音楽学校甲種師範科卒）が浄書していた。（「海ゆかば」自筆譜の楽譜末尾には「清書頼む」と書いてある。）自筆譜、ミイによる浄書譜、共に多く残っているので、ほとんど迷うことなく、潔筆、ミイ筆、と判定できた。「海道東征」フルスコアの場合、タイトルページの曲名、章名一覧の「文字」は自筆である。ところが、楽譜は「自筆譜」と言い切ることを躊躇する何かがあった。

その理由がわかったのは、2005年、岩手大学の図書館に「海道東征」の自筆譜？が展示してあると聞いて、岩手まで確認に行った時だった。岩手大学教育学部の木村直弘教授らによれば、数年前に岩手県一関市で、疎開してきた荷物一式の中から見つかり、同学部に持ち込まれたものだという。

信時家に残っていたスコア（以下「信時家スコア」）と、岩手大学の「海道東征」（以下「岩手スコア」）と見比べたところ、突然ひらめいた。筆跡が語りかけて来たのをキャッチした瞬間だった。岩手スコアの筆跡は全体的に統一感があり、ミイの筆跡と自信を持って言えるものだった。その声楽パートだけを見比べると「信時家スコア」と筆跡が同じなのだ。詩を見て、ピアノを弾きながら作曲し、まずヴォーカル・スコアを仕上げた。その声楽パートをミイがフルスコアに書き写し、そこに潔が管弦楽パートを書き込んでいくという流れは、信時家的には自然だった。

これがわかってから、筆跡の見分けをつけるのが楽になった。八分音符の上向きに跳ねる旗が直線的なのは潔（□印）、一度折れ曲がってから跳ねあがるのはミイ（○印）。ト音記号が細長いのは潔、丸みを帯びて上半分が右側に飛び出すのはミイ。黒塗り音符が点や棒に近いのが潔で、まん丸いのはミイ。以後、他の作品や書込みの筆者判断にも、これが非常に役に立った。

「信時家スコア」は、管弦楽スコアの決定稿で、大部分が潔の自筆、声楽パートはミイの筆跡である。「岩手スコア」は、決定稿が仕上がったあとに、ミイが浄書して、委嘱団体「財団法人日本文化中央聯盟」に納めた。初演当時はこれが使われた。指揮者のものらしき書込みも多数見られる。パート譜は、初演時の「財団法人日本文化中央聯盟」印入りのもの（東京藝術大学附属図書館蔵）が戦後の再演でも使われたらしいが、同じ印が入った「岩手スコア」は、1943年に共益商社書店から「管絃楽総譜」が出版されてから、出番がなくなった。いつ、誰の手にわたり、どこで保管されてい



(上) 潔筆 (下) ミイ筆の部分

たのかわからないが、ありがたいことに、最終的に岩手大学図書館にたどり着いたのである。

※信時家スコアは、現在東京藝術大学附属図書館蔵。岩手スコア(画像)も信時潔文庫で閲覧可能。

写真：東京藝術大学附属図書館 信時文庫/貴重楽譜/0361 「海道東征」

http://jmapps.ne.jp/geidailibnobutoki/det.html?data_id=3397